

芦屋市史 本編

第一章 自然的環境

(一) 市域の広がりとその位置

市域の広がり 芦屋市は京浜地方の鎌倉市、阪神地方の豊中市と併称される大都市近郊の高級住宅都市としてその名は全国的に有名である。昭和二七年三月、芦屋国際文化住宅都市建設法なる特別法が制定せられ、ついで同年四月芦屋市の主唱により同じく特別法が施行せられている八都市すなわち芦屋・別府・熱海・伊東・奈良・松江・松山・軽井沢を統合して国際特別都市建設連盟が結成せられた。こんな具合で、芦屋市は国内的ばかりではなく、国際的な都市としての大きい使命を持った都市ではあるが、その市域は東西二軒余、南北七軒余、面積一五平方軒余という面積の小さい都市である。従って面積から見ると、同じような機能をもっている東京都下の

立川、大阪府下の守口・泉大津市などに次ぐ全国でも今どき珍しい市域のせまい都市の一つである。

自然的な位置

芦屋市は市制施行の当時でさえ、当市独自の気品の高い性格が損われることを慮おぼんばかつて市域の拡張に消極的であった珍しい都市である。そんな関係で市域は極めてせまい。しかし当市が立地する場所は広い大阪市周辺の沖積低地と六甲山麓の帯状の海岸の緩傾斜地とが移り変るところに当たっている。従つて守口・立川市などの低地住宅都市とちがつて地形の変化の多い、交通の便利のよい土地に、当市域が広がっていることになる。

社会的な環境とその変遷

前述の通り芦屋市は近代的な住宅都市としては極めて恵まれた自然的な環境を備えているといえよう。しかし当地域在住者の生業が農業や漁業であった明治以前などでは、漁業を営むのに適当な入江も見られず、農業を営むにも土壌は生産力の乏しい砂礫或は粘土質の悪地から出来ていた上に水災が絶えなかった。こんな関係で早くから灘清酒の生産地として知られてきた西宮・今津・魚崎・御影・西郷等とは勿論のこと、本庄・青木村などの農漁村にも劣る淋しい集落の一つであった。すなわち、旧藩時代などでは、現在の都心部ともいへべき芦屋川畔の土地などは、水害に悩まされつづけた生産力の乏しい悪地であり、水害の恐れのないなかつた打出台地を中心とした街道筋を主要な生活舞台とせねばならなかつたほどで、云わば阪神間でも最も生産力の乏しい無名集落に近かつた。

ところが、明治、大正時代になつて大阪・神戸市などが産業革命に伴い異常な発達を遂げその市民の日常生活圏の拡大が切実になつてくると、それらの都市の都心部まで十数軒という地理的位置と、大都市の住宅地とし

て最良の条件を備えた当市は、住吉川畔の住吉、御影（現在の神戸市）とならぶ高級住宅地として繁栄することになった。戦災で甚大な被害を受けたが、それにもかかわらず勝れた地理的位置を占めている関係で終戦直後は政令で阪神両都市への転入をこぼされた人達のそこでの活動の基地として当市が選ばれ、更に年月の経過と共に母市の密住化がひどくなってくると、最近のように戦後の母市転入者の再疎開地となるという具合に、戦後の発展が目ざましいのも、当市の大都市郊外の住宅地としての地理的位置の優秀さに負うところが極めて大きいと云わねばならぬ。

参考・文献

- (1) 国際特別都市建設連盟 観光文化の八都市 一九五三年
- (2) 旧陸地測量部 二万分一地形図西宮、今津図幅（図版第4）

(二) 市名及び町名の由来

市名の由来 現在の市名である「芦屋」の名称は去る昭和十五年一月一日、当時の精道村が市制を施行するに当って打出、三条、津知とならんだ旧大字名の一つであり、昔から人口に膾炙してきた芦屋の字名をそのまま新市名に選んだことに始まる。もともと芦屋という地名は、福岡県遠賀川の河口の集落名にもみられる通り海辺、河辺の低湿地の芦原、葦原を意味するところで打出と共に云わば地形に、関係の深い地名である。

六甲山南麓の臨海低湿地の呼び名としておこった芦屋或は葦の屋の地名の起源は、万葉集、伊勢物語、後拾遺

集、千載集及び新古今集その他の歌書や物語に現われている通り極めて古いことではあるが、古代の呼び名は必ずしも現在の芦屋市を限って命名されたものではなかったらしい。芦屋、葦の屋の地名かも判断される通りそのような呼び名は、六甲山地南麓の臨海の低湿地を総称して芦屋の里と呼んだらしく、古書に見られる「芦屋の浦」或は「芦屋の灘」の呼び名についても同様のことがいえよう。こうして六甲山南麓の臨海低湿地の総称として始まったと考えられる地名が、当地域一帯の開発が進むにつれていつしか芦屋川河口のせまい地域の呼び名にかわつたらしい。

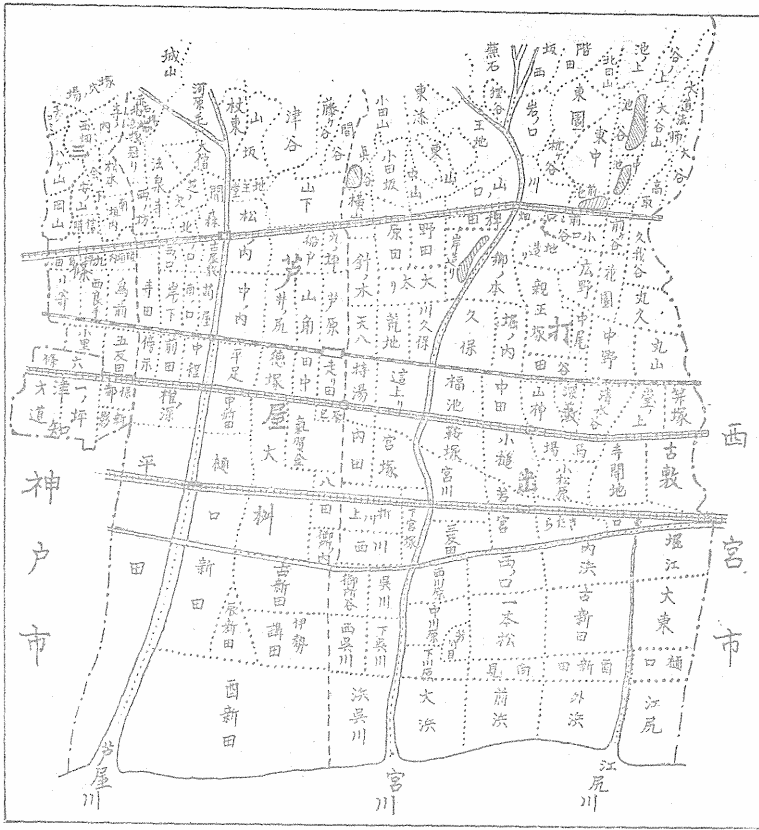
以上の通り芦屋の呼び名に含まれる地域は時代の推移と共にかなりかわつてきたものの古来から人口に膾炙してきた地名であつたから、明治二二年の新村制施行当時、打出・三条・津知の旧三村と新村を構成するに当つて同村内小学校名をそのまま採用して精道村と名を改められることになつたが、精進村の名は一向普及するに至らなかつた。すなわち、その後同村内に私鉄、国鉄駅や郵便局が設けられるに至つても精進の名は用いられず、何れも芦屋の名称がそのまま採用される有様であり、大正に入つて当地域が高級住宅地として有名になつてもその呼び名はやはり芦屋で代表された。こんな事情であつたから、村名が精道村に改められた以後も世間的に普及していた芦屋に改名しようとする意見が村人間に強かつた。市制施行と同時に再び芦屋市と改称されたのも自然のなりゆきで、今では旧村名精道は町名や小学校名にその名残りを留めるばかりである。

町名とその由来 わが国の地名は、平常その由来など意にとめることなくそのまま使われているし、時にはふとした思いつきで変更されてしまう場合も起つている。しかしその由来にそれほど深い意味のないように思われ

ている地名の場合でも、記録その他で知り得ないその附近の集落成立当時の自然状況やその地を舞台としてくりひろげられた様々の物語や歴史的事実を裏書している場合が少くない。芦屋の旧字名は地番と共に昭和一九年にかなり近代的な地名に改められ、現在の町名から往時をしのぶことはかなり困難になっているとはいふものもそれからでも町名の由来やその地の歴史的な事情をかなり明らかにすることができよう。すなわち前述の芦屋とならば旧集落の一つ打出は琵琶湖畔の天津市附近にも同名の地名がある通り、内陸づたいの街道が始めて浜手に出た処という地形名であらうし、芦屋川畔の松の多い浜手の新田部落の改称名である松浜の町名も天井川畔から海岸砂丘地帯の開発当初の自然景を巧みに示した町名といえよう。また東芦屋、西芦屋、浜芦屋等は打出、西打出浜打出と同様旧藩時代からの集落の発達の方向を示す地名であり、西山、東山、山手などの地名は大正以降の市街地の発展方向を示す地名といえよう。

このような地形名やその位置に由来する町名、旧字名に劣らず注目を引くのは歴史的な地名である。すなわち当市の最も古い集落の一つである三条町は奈良時代の条里制地割に由来する地名として有名である。更に市制施行後主として登場するようになった月若、公光、業平、打出親王塚、小槌、宮塚、楠町などの町名は歴史時代の名士の居住地や古戦場その他の伝説に由来する興味の深い町名と云つてよい。また当村が西国街道沿いの街村であったからそれに関係の深い町名として茶屋之町或は旧名辻と呼ばれた津知があげられようし、臨海地域の伊勢町に至っては旧名伊勢講田の字名の示す通り近世の開発形態が字名となつて残されたのであらう。

以上の通り芦屋市の町名にはその由来に興味の深いものが少くない。しかし近時土地会社などの手による住宅



本図以北の地の字名

- (打出) 劍谷, 奥窪, 大天, 久保見, 大窪, 鞍長, 賣鞍, 岩宮, 岩北, 宮西, 岩ヶ平, 岩下, 土谷, 奥谷, 奥土谷, 山添, 大原
- (芦屋) 角石, 奥山 (打出地区にまたがる)
- (三条) 大原, 車場

第一圖 芦屋市旧字名図

経営地などになると六麓荘、朝日ヶ丘、打出翠ヶ丘等の如く宣伝価値に重きを置いた町名がその数を増してきたことは大都市近郊の他の住宅都市の場合と同様の傾向であろう。

参 考 文 献

- (1) 島之夫 芦屋の里 頁五七―六六その他 一九二九年
- (2) 天王寺谷勘太夫 打出史話 一九三五年
- (3) 細川道草 芦屋の地名考 兵庫史学 八号 一九五六年
- (4) 柳田国男 地名の研究 一九三六年

(三) 生活の舞台

(1) 土地の生いたち

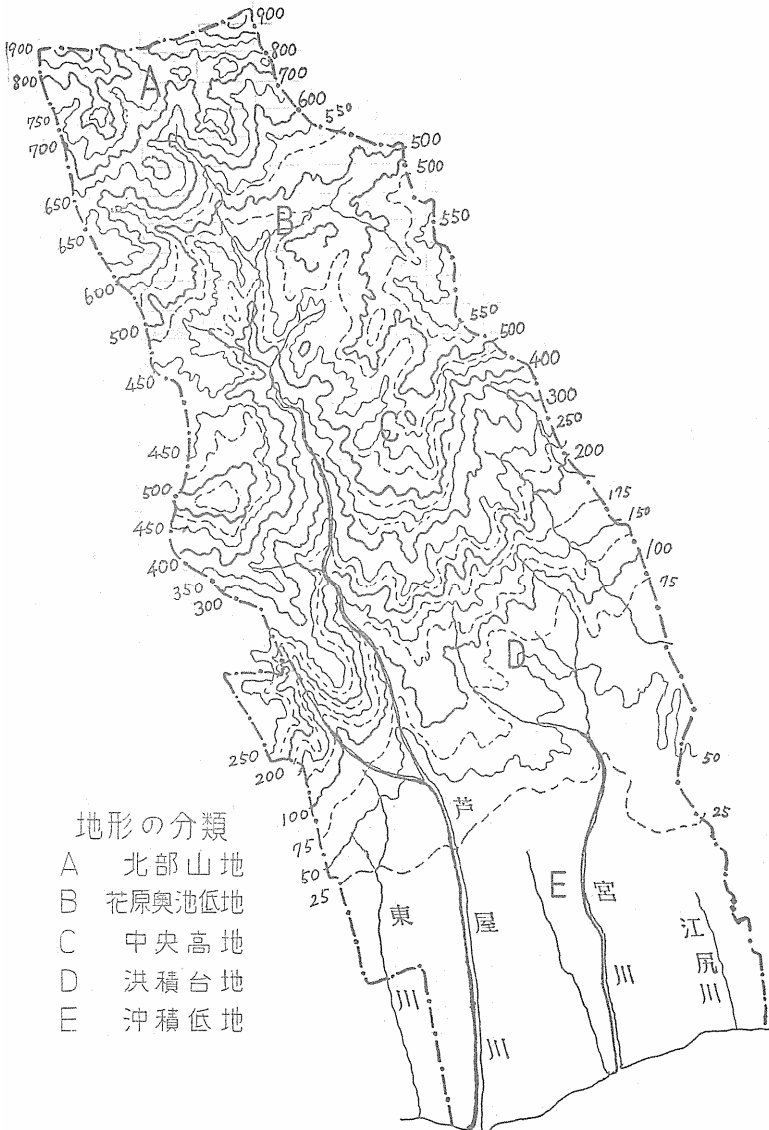
芦屋地域の三分の二の広い面積を占めているのが東六甲山（九三二米）などを主峰とし西南の舞子、垂水の海岸から東北方の武庫川のほとりにのびる六甲山地である。またこの山地が第三紀以後の大阪湾の陥没に呼応した衝上断層で隆起し、陸上に姿を現わし、そこから崩れだした岩屑が大阪湾の浅い海を埋めて次々と陸地を形成した処が現在の主な当市の市街地となっているところである。云わば第三紀における六甲山地の誕生こそ、当市の生活舞台の生みの親と呼んでよい。すなわち前輪廻の侵蝕ですっかり低平化された土地が隆起し始めると、これまで地中深く埋まっていた風化に弱い花崗岩が地表面に姿を現わし、盛んに風化物質を山麓に送り出し始めた

し、隆起に當つて住吉川、花原、芦屋、高塚山断層その他の複雑な断層で地盤が寄木細工を積み重ねたようにこわされた。その結果、山地から流れ出すことになりた芦屋川、宮川の本支流などの大小の若い侵蝕谷の山地侵蝕力は一層ひどくなるし、その結果山地から崩壊した岩屑や河川で下流に運搬された土砂や岩礫は、山地前面の海を埋めて新しい陸地をつくつた。それらの陸地が間歇的な隆起で一段高い台地となると、台地前面の海がやがて河川の運搬した土砂で埋められて、台地前面に沖積平原が生まれるといふ具合に新しい陸地が続々誕生した。その結果このせまい市域に平地都市では見られぬ複雑な生活舞台が展開されることになった。

(2) 複雑な地形

山地の急傾斜面と平坦面 六甲山地は第三紀以後の隆起以前はいわゆる準平原とも呼んでよい平坦な土地であつた。しかし前述の通り、隆起に當つて複雑な断層を伴つたため、山地の旧態もかなり變形されて人々の生活に今なお多くの影響を与えることになった。すなわち、北部では花原、中畑を結ぶ断層を境にその北部の六甲山頂部は九〇〇米、その南の砂山、雷山（五六五米）、荒地山（五四八米）等中央山地部が五〇〇米といふ具合に差別的隆起を行つたため、南北両山地は急斜面で花原、中畑、奥池一帯の更断層の地溝帯に臨むことになった。そして両急傾斜面に囲まれた山間の別天地の平坦地は時にはゴルフ場、灌漑用水或は上水道の水源池、或は市民の休養地として重きをなす原因にもなつた。

こんな具合で地盤の差別的隆起の影響を受けて低地のまま残された地域は、多面的な利用が早くから進められてきたが、地畧状に異常な隆起をみ、侵蝕基準面に大きい変化の起つたお多福山、石宝殿山等の山頂部、荒地山



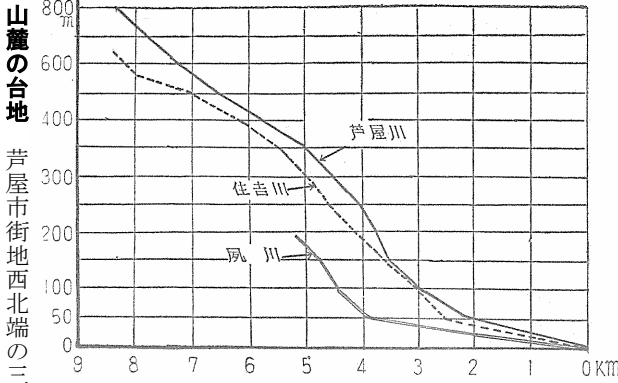
第2図 芦屋市地形区分図

一帯の中腹山地は、地表面の秩父古生層が蚕食され地中の花崗岩が姿を現わすと同時に花崗岩山地特有の雨裂、類岩、露岩、散岩の多いひどい悪地に変わっていった。現在ロッククライミング客で賑わっている高座川上流の

ロックガーデンは云わばその代表的な土地であり、観光地としてはさることながら治山、治水の見地からみると裏六甲の坐頭谷と同様問題とせねばならぬ山地であろう。

若返る河川

住吉川、花原断層で二―三の地塊に切断された六甲山地が、更にもその南端を東西にのびる芦屋断層で切断されて大阪湾側に急傾斜の衝上断層面を向けると山地から多量の岩屑が海上に流下することになった。と同時にこの地に流域をもつ芦屋川の本支流の若返りがひどくなった。芦屋川下流の水車谷からその上流花原高原低地に至る芦屋川の本支流の河床附近に見られる断崖・絶壁の奇勝はこのような過程で形成されたものである。また地盤の差別的な隆起に伴って河川が若返ると芦屋川の土砂の運搬がはげしくなると、下流に扇状三角洲を形成する動機になったことは後で詳細に述べる通りである。



第3図 芦屋川河床傾斜断面図

山麓の台地

芦屋市街地西北端の三条からその東北方を結ぶ芦屋衝上断層崖下の海を埋めた崩壊土砂が、その後の地盤の隆起で陸上に姿を現わしたのが山手住宅地として有名な山麓台地である。六甲山地と海岸の沖積低地

の間に東西に広がる芦屋の山手台地は、西は神戸、東は西宮の山手につづく台地で、三条・山芦屋町附近では幅五〇—六〇米に過ぎないが、東するにつれ幅をまし、山手・東芦屋・東山町では一軒、六麓荘・朝日ヶ丘・岩園町では南は海拔高度二五〇米の六麓荘・朝日ヶ丘の各町に至る幅二・五軒以上の広い地域に及び、その西部は交通の便利のよい芦屋川畔とともに高級住宅地として早くから知られてきた。

しかし、東部になると、交通が不便である上に、宮川の本支流の頭部侵蝕や、陸地化後山地より新たに転落してきた崩積物でかなり起伏が大きくなっている。特に芦屋駅—岩園—高塚山を結ぶ高塚山衝上断層の南北一帯はその影響でもとの台地面の高度はかなり乱されてしまっている。こんな関係で、六麓荘町を除くと住宅地化としての開発がおくれた。しかし戦後集団住宅地化がすすみ、最近では大規模な高層住宅をめぐした住宅地造成が急がれ、今後の住宅地としての大発展が期待されている。

沖積低地 山麓の更新層の台地と南の大阪湾岸との間の海拔三〇—四〇米以下の海岸低地は、衝上断層崖の急傾斜面を流下した芦屋川、宮川及びそれらの河川の名残川ともみられる傍示川、江尻川、堀切川等の運搬した砂礫堆積物からなる扇状三角洲で、当市の主要生活舞台となっている。とりわけ他の河川にくらべて、背後に広い花崗岩の崩壊地域を擁し、六甲山系のなかでは住吉川、都賀川に勝るほどの河床勾配の大きい芦屋川の堆積作用は盛んであったから、山麓の傾斜変換地点とも云うべき水車谷附近を頂点とし西は本山、東は宮川河口を底辺とする扇状三角洲をつくった。また近来同河川の上流部に多数の砂防堰堤が完成し、砂礫の流下量は急激に減少したが、それらの工事が施行される以前では、大量の土砂が不断に運ばれた関係でそれらの土砂は河床にうず高く

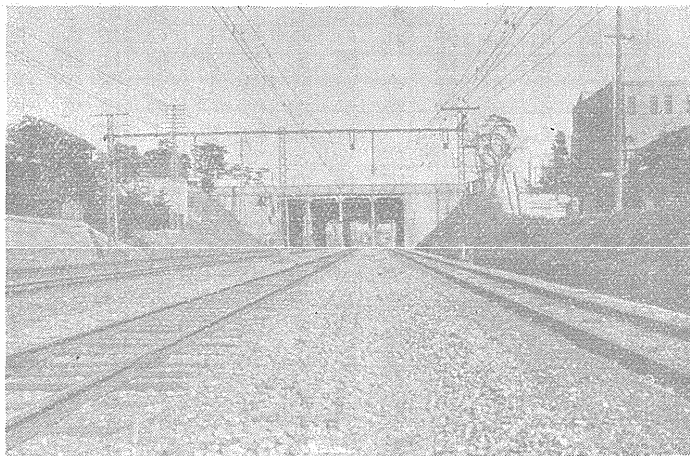
堆積して河床を高め、その結果頻発するようになった洪水防止の目的で護岸工事が進められ、堤防上には流木土

砂岩塊の溢出の防止を目的とした松樹が植林されたりした。その結果、芦屋川河畔も花崗岩地域を流れる河川にありがちな河床は附近の低地より数米も高く、鉄道を敷設するにはトンネルを以て河床底を通過するより外に手のない、いわゆる天井川風景が展開されることになった。

移り変わる芦屋川畔の風景

河床が附近の低地より数米高い

芦屋川畔は、洪水の危険もそれだけ大きいことが予想されるし砂礫の多い土壌は、農耕地としては恵まれず、第一次産業が主な生業であった明治以前では、当地域の開発に大きい支障をもたらしてきた。ところが近代都市の住宅地としてみると芦屋川畔の天井川式の地形は、土地は高燥であり、地下水は清浄であり、堤防上の老松とその間を流れる地表水との織りなす風致は低湿な沖積平野にみられぬ住宅地として理想的な条件を数多く備えていたことになる。こんな事情であったから母市大阪・神戸市の密住化がひどくなり、その地の在住者が環境衛生の快適な

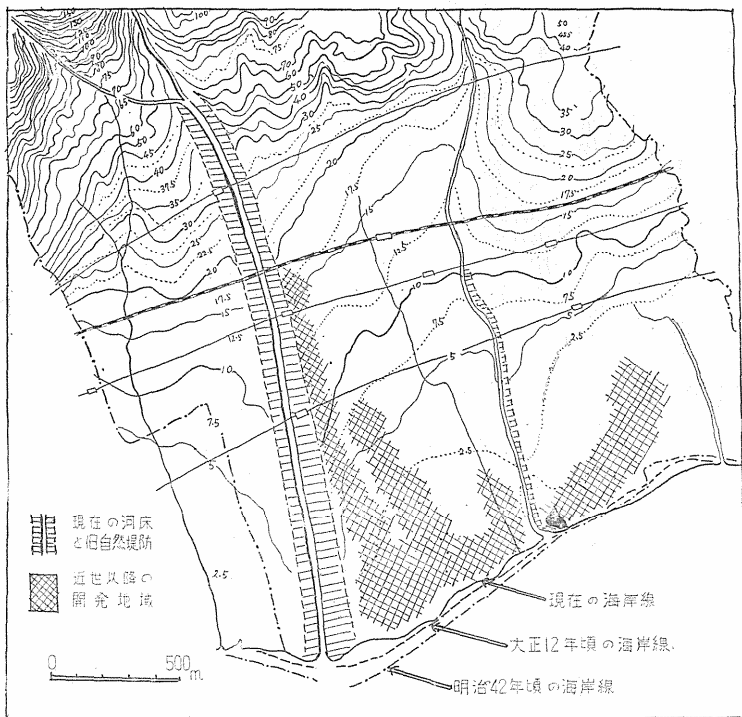


第4図 芦屋川河床下を通る国鉄軌道

住宅地を郊外に求めだすと芦屋川畔は住吉川畔とともに関西富豪の住宅が軒をならべることになった。しかしこうしてこの地の住宅地化が著しくなると、遂に自然堤防上にまで宅地が進出し、旧河床の一部は埋められ、護岸用の松樹は追々伐採され、往時幅一五〇米前後に及んだ芦屋川河畔の自然的な眺めは、次第に跡を絶ってきた。^{註①}と同時に、これまで土砂で主として固められていた河岸は洪水時の水蝕に備えてコンクリートや石垣で護岸され河床には下刻作用による河道の破壊を防止する意味で堰堤がならび、河床は敷石で埋められたりして自然の河川らしい姿は消えさろうとしている。既に天井的な美しい姿を歴史でしのぶはなくなつて雑踏の巷となつた神戸市内の河川の先例を思うとき、芦屋川の河畔風景の変貌は住宅都市芦屋の将来から見て惜しまれる。

註(1) 芦屋市史 史料編第一 頁三四

後退する海岸線 宮川は集水面積がせまい上、河床の傾斜が大きくない。こんな関係で河口附近は運搬する土砂による海底の埋積がおくれ、河口の海岸線の進出がおくれがちで不健康な低湿地であることは芦屋川と住吉川の扇状三角洲の移り変わる場所ともいふべき青木、深江の海岸とよく似ている。しかし同じ芦屋の河川のなかでも芦屋川となると、住吉川と同様六甲山麓の河川のうちで特に河床傾斜が大きく集水面積が広いので、河口附近の海岸線の進出は古来特に大きく、近世開発の臨海新田集落の辰新田、伊勢講田、古新田なども今では内陸深く後退している。ところがこのように盛んであつた芦屋川の多量の運搬物による造陸作用も、明治以降の治水を目的とした河道の改修、護岸工事の進捗、ことに上流部一帯山地の砂防工事の成功で急激に衰えをみせて来た。その結果阪神の海岸に沿つて東流する沿岸潮流による海岸線の蚕食度合は河川の海底埋積作用を上廻る結果になり



第5図 芦屋川三角洲の今昔

今では芦屋川の三角洲の成長は停止するどころか逆に海岸線の後退が目立ち始め、臨海集落に新しい悩みの種を蒔くことになった。芦屋川三角洲の尖形状態はその現われであり、^{註①}明治の末年頃を基準にとると現在の芦屋川河口から一〇〇米後退し、大正中期からみても六〇米も後退したことが明らかにされている。沿岸流の影響で江尻川河口附近に最近多少の海岸線の進出をみとめるとしても、当市の主要生活舞台である芦屋川扇状三角洲の海岸線の後退は、治山治水工事の進捗と呼応して避け得られなくなったのも自然のなりゆきでその結果台風時における高潮に備えて

防潮堤の構築の必要を切実ならしめた。こうして芦屋市の海岸に高潮に備えて尼崎付近から延々たる防潮堤がで



第6図 芦屋海岸の防潮堤

き上つてみると高潮による臨海地域の被害は一応避けることができるようになったというものの海岸の風景美はこわされ、それが電鉄の軌道などと呼応し豪雨時の排水を妨げるようになったのは皮肉である。

註(1) 上治寅次郎 芦屋市地質調査報告書 一九四八年

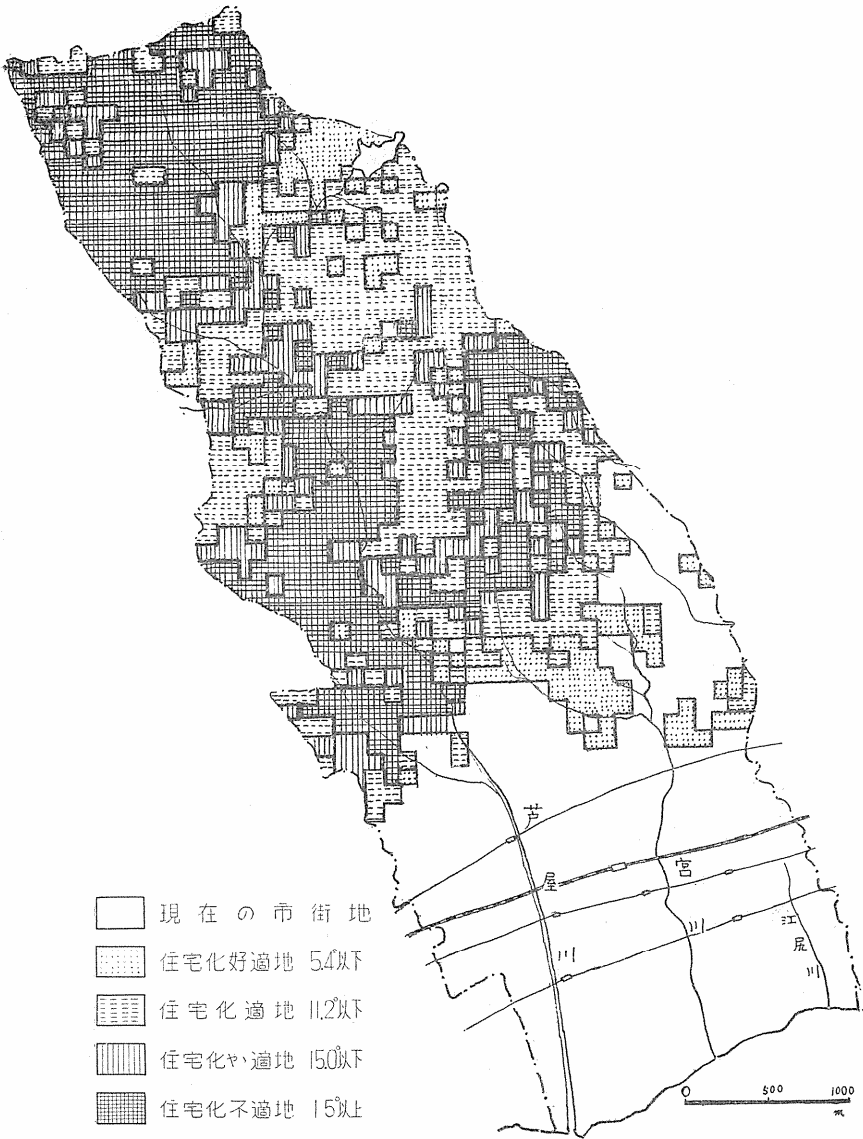
高度、起伏と傾斜

前述の通り芦屋市域は海拔九〇〇余米の東六甲山を最高とした六甲山地とその山麓に発進した洪積台地

や沖積平野からできている。とここで市域の高度別の割合を求

註①

めると、海拔高度五〇〇米以上の中山性山地が市域の一七—一八%を占め、海拔一〇〇米以下の低地並に二〇〇米以下の台地がそれぞれ残りの半ばを占めるといふ具合で市域全体の高度はさして大きくない。ところが、地表面の傾斜の割合を求めると地表傾斜百分率五%、二〇%以下の地域並びに二五%以上の地域がそれぞれ全市域の三分の一を占め、平地と呼んでよい地表傾斜二—三%内外とみられる平坦地は全市域の二〇%を占める



第7図 傾斜より見た新市街地の限界

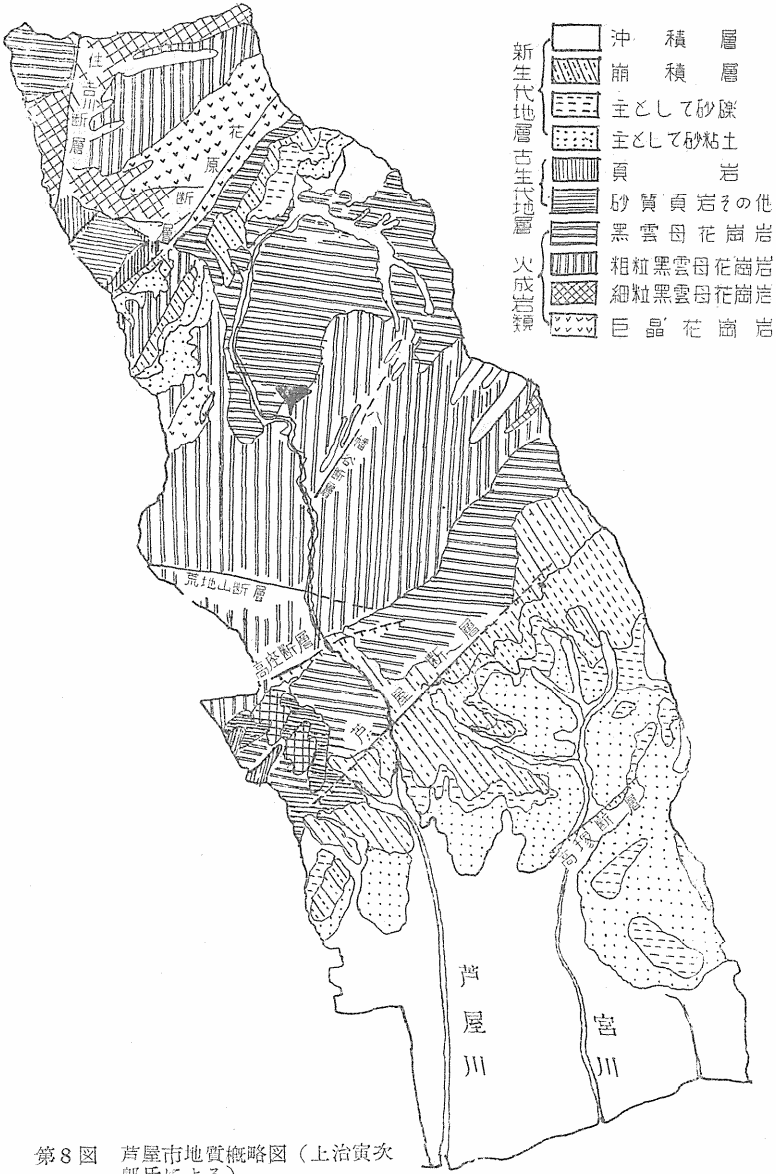
に過ぎない。従つて市域全体の高度はさして大きくないにもかかわらず、市域の傾斜はかなり大きく、臨海沖積地の都市とは変わった自然的な趣が見受けられる。

ところで地球表面に現われている地表の起伏や傾斜などは、云わば前輪廻時代における地表面の侵蝕状況或は海辺よりの距離や海拔高度に支配されがちであるが、当市の場合谷の密度の異常的な分布状況でも分る通り、六甲山地一帯の隆起に伴う地盤運動の影響で山地の高度と地表傾斜率との関係はかなり乱されている。すなわち地表傾斜二〇—三〇%前後以上の急傾斜地が六甲山頂部近くに広がっているかと思つと、同様の急傾斜地が六甲山地中腹の芦屋川本流両岸、並びにその下流の山麓台地末端部に広がっている。またその反対に芦屋川、宮川の扇状三角洲面上の緩傾斜面に次ぐ緩傾斜面が剣谷国有林山地を隔てて、その北斜面の芦屋川上流部に広がるなど地表傾斜と山地の高度との関係は極めて複雑である。

註(1) 稲見悦治 急坂都市に於ける住宅地の傾斜とその限界—急坂都市芦屋の場合— 神戸大学文学部 “研究” 八年 一九五五年

参 考 文 献

- (1) 本間不二男 六甲山地の形式 地球 一〇卷四号 一九二八年
- (2) 上治寅次郎 六甲山塊南麓に於ける新生低地発達に関する考察 地球 二五卷三号 一九三六年
- (3) 脇水鉄五郎 車窓から見た自然界 東海道 同 山陽道 一九四二年
- (4) 稲見悦治 天井川雜観 地理教育 三三卷五号 一九四〇年
- (5) 山本吉之助他 神戸市近郊の区分調査について 一九三九年



第8図 芦屋市地質概略図（上治寅次郎氏による）

(3) 地質の構造と地下資源

芦屋地域の三分の二を占める山地は主として花崗岩でおおわれ、残りの三分の一の地域は山地からの崩積層及び新生代の成層岩で占められている。しかし、山地に花崗岩に交って更新層が散見し、市域のせまい割合に地形と同様地質構造もかなり複雑である。

花崗岩 芦屋市の山地に広く露出する花崗岩は地殻深くで岩漿が固まった当時の状況に応じて黒雲母花崗岩、粗粒黒雲母花崗岩、巨晶花崗岩、細粒花崗岩及び班状花崗岩等その種類が多い。とりわけ生成が早く六甲山地一帯の花崗岩の主体をなしている黒雲母花崗岩及び粗粒黒雲母花崗岩のうち、前者は芦屋断層以北の山腹の中畑・砂山・芦屋川支流の石仏谷・石釜谷及び山頂の石宝殿附近に広く露出し、後者は同じく山腹の荒地山・ロックガーデン・剣谷国有林・芦屋川中流の八幡谷・黒越谷・花原から更に山頂南斜面の熊笹峠附近に広く分布している。また粗粒花崗岩の一種ともみられる巨晶花崗岩は芦屋川本流沿岸、椿谷及びその支流黒越谷から花原ゴルフ場への路傍に姿を見せている。ことに粗粒黒雲母花崗岩は、花崗岩の内でも特に物理的風化に弱い岩石であるから風化岩屑がそのまま山頂をつつむと植物の生育も稀な荒涼とした風景が展開されやすい。既にのべた高座川流域のロックガーデン一帯の風景はその好例である。しかしこのような岩石の風化のはげしい山地があつて始めて多量の岩屑が山麓崖下に送られることになったのである。当市の山麓地帯以南の主要生活舞台の出来上った直接の原因はこの山地の存在にあつた。

黒雲母・粗粒黒雲母・巨晶花崗岩に次いで生成された細粒花崗岩及び班状花崗岩となると、花原断層以北の山

頂部その他に露出しているが、粗粒花崗岩にくらべて風化に対して抵抗力が大きいので、中腹の粗粒花崗岩地帯ほど山地の崩壊度がひどくない。

秩父古生層 成層岩のうち起源の古い秩父古生層は、更新世の頃までは現在六甲山地に広く露出している花崗岩を覆って広い範囲に分布していたらしく、現在山麓の更新層の砂礫層中に秩父古生層に起源をもつ砂礫が甚だ多いのはその現われとみられる。このようにして六甲山地の花崗岩地帯を広く覆っていたと思われる秩父古生層も山地の隆起に応じて侵蝕され、今では芦屋川の支流高座川の中流或は芦屋川上流の花原の東お多福山附近に限されている。高座川中流の秩父古生層は黒色炭素質粘板岩、頁岩或は花崗岩との接触変成による変質粘板岩（ホーンフェルス）からでき、接触変質で硬質になった変質粘板岩はガラスの材料として採石されている。また東お多福山附近の変質のはげしい粘板岩、砂質粘板岩の互層からできた秩父古生層は住吉、花原その他の断層で裁断され、同地層堆積後の地殻変動のはげしさを物語っている。

更新層 成層岩のうち起源の古い秩父古生層が六甲山地の高処部に散在しているのに対し、起源の新しい砂礫或は泥岩等からなる更新層は海拔高度四〇〇—五〇〇米の山腹、同じく一五〇—三〇米の山麓部に花崗岩地域を隔てて分布している。すなわち山腹の更新層は奥池から花原にかけての高原状台地の別天地となり、山麓の更新層は三条から六麓荘にかけての山麓の高燥住宅街に広がっている。しかしこのような同一の性質を有する新生代地層が幅数軒、垂直高度差四〇〇—五〇〇米を以て散在していたり、また厚さ一〇〇米内外の更新層は砂礫、泥岩などからなる下部の淡水性地層と泥岩、礫岩、砂層或は砂及び泥岩の互層からなる鹹水性の地層とが整合に堆

積していたりしている点など、当市附近の陸化の過程を知る上に極めて興味のある地学的現象といわねばならない。また花原から奥池に至る山腹の台地に今なお珍らしく低地が残存し、泥炭地に特有な植物の自生すら見られ、低湿地から泥炭地への移行が新しいことを示しているのも興味が深い。

現世層 山腹の高原低地の周辺並びに山麓から海岸にかけての低地部をおおっているのが現世層である。急傾斜地を背後に控えた山麓崖下の崩積層は山地の急傾斜地より転落した岩塊、岩礫、岩片よりなり、時には直径一米以上の岩塊すら交えているし、それらの岩屑は河川に運搬されて旧浅海を埋めた結果が現在市の主要生活舞台となっている芦屋川その他の形成にかかる扇状三角洲に当る沖積低地である。

地下資源 一般に巨晶花崗岩、粗粒花崗岩には各種金属鉱物や非金属鉱物を伴いやすい。本市域でも芦屋川支流椿谷川の上流及び芦屋川中流の弁天岩附近に銅鉱脈、その東北方八幡谷川上流に高陵土鉱の存在が知られている。また芦屋川本流並びに支流の更新世の粘土の中に褐炭が埋蔵されたりしているが採鉱稼行されるに至っていない。僅かに芦屋川底の花崗岩砂礫や山芦屋その他にみられる秩父古生層の崩壊礫や打出台地の粘土などが若干利用されている程度に過ぎない。

鉱泉 芦屋市域は地塊運動がはげしかった六甲山地の一部に当たっている。そんな関係で地下の構造線に沿って数か所の鉱泉の湧出地が報告されている。すなわち芦屋断層と芦屋川の交叉点近くの芦屋川鉱泉、高塚山断層に關係ありとみられる岩園町の瓢箪池鉱泉、前池鉱泉、宮川上流侵蝕谷上の朝日ヶ丘鉱泉及び花原断層に關係の深い奥池鉱泉等その数は必ずしも少くないが現在までのところ利用価値は小さい。

参 考 文 献

- (1) 上治寅次郎 芦屋市地質調査報告書 一九五三年
- (2) 同 六甲山塊南麓に於ける新生代地層とその構造 地球 二五卷五号 一九三六年
- (3) 新光社 改訂日本地理風俗大系 近畿篇 一九三五年

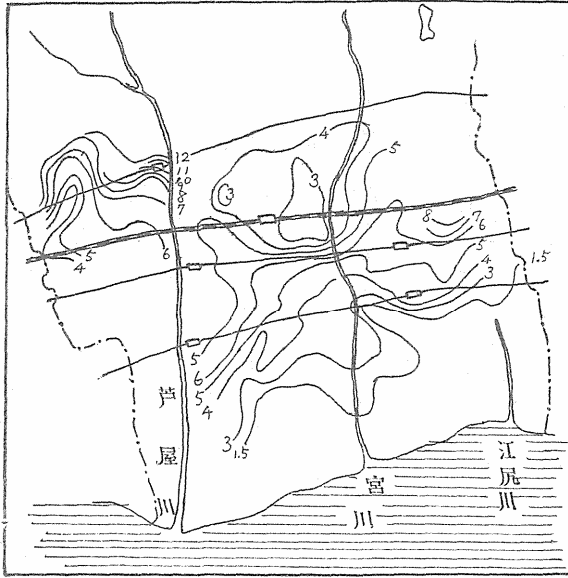
(4) 地下水の状態

上水道の普及がめざましくなってきた今日では、地下水面の深さやその性質はそれ以前ほど市民の生活に重要な役割を果たしているとは考えられなくなってきた。しかし上水道の普及以前では、地下水面の深さや性質如何は集落の位置及び発達方向を規定する重要な要素であった。とりわけ河水が伏流しがちであった当市の場合地下水の状況は、古代集落の位置及びその後の発達方向を左右する有力な要素であった。

地下水面の深さ 芦屋市街地の地下水面の高さをみると、阪急電鉄軌道以北の洪積台地上の三条、朝日ヶ丘、山芦屋町などでは地下水面までの深さ一〇米を越えるところも珍らしくなく、岩園町などでは二〇米を越えるところがみられる。岩園町一帯の開発が主として近世以降になったのも灌漑用水と同時にこの飲料水の入手難にあつたことは西宮の山手ヶ原台地の場合と同様であつたであろう。

前述の通り当市では山麓高位台地の地下水面は深い。しかし芦屋、高塚山断層などで高位山麓台地と隔てられた打出の低位台地、芦屋川河畔の沖積低地になると急激に浅くなり、西山・三条町あたりでは、地下水瀑布線らしいものが現われているほどである。阪急軌道以南では地下水面までの深さの最も大きい月若・三条・打出南宮町附近でも七―八米、阪神軌道附近では三―四米、更に臨海地域の伊勢・松浜町にもなると二米前後という具合

に山麓から海岸にすすむにつれて地下水面は徐々に浅くなっている。こんな具合に芦屋市街地の地下水面の深さはほぼ海拔高度に比例して変化しているが、国鉄芦屋駅を中心とする地域には宙水地域ともみられる独立した浅井地域が横ぎっている。旧西打出村、すなわち現在の上宮川町附近が、芦屋川の溪口、西国街道沿いの一帯にならんで早くから集落が成立したのも、この附近の独自の地下水面の深さの異常に関係があつたのではなからうか。



第9図 芦屋市井水深度図（上治寅次郎氏による）

註(1) 渡辺久雄 甲東村 頁二三四以下 一九四二年

クロール水素・イオン濃度の分布 市街地の井水

の塩素イオンの含有量は、井戸の所有地や附近の環境で多少変わっているが、一般に塩素イオンの含有量の多い井戸が比較的多い。地域別にみると、芦屋川河口に近い松浜町一帯及び宮川以東から江尻川以西の打出西蔵・南宮町にかけての臨海低地の井戸水には、塩素イオン含有量が特に多く、海水の混入がかなり大きいことを暗示している。しかし市街地の中央部宮川・茶屋・宮塚の各町の井戸になると、地下水面の深さや海拔高度との関係から分る通りに、海水の滲透による

悪影響が殆んどみられない。

一方、井水中に含まれている水素イオン濃度すなわちpHについてみると、当市街地の井水は弱酸性を示している。しかし業平町から打出にかけての井水の酸性度は一層高まり、海岸低地の井水は海水の影響もあつて酸性かち中性への移行の状態が示されてくる。

要するに芦屋市街地の地下水位は海拔高度に一応支配されているが芦屋川・宮川扇状三角洲ではその滲透水の影響を受け地下水位等高線が乱れ、臨海地域は海水の影響でかなり水質に異状が現われていることに気がつく。

参考文献

- (1) 前掲書 芦屋布地質調査報告書 一九五三年

(5) 瀬戸内式の気候

温暖な気温と少い雨量

芦屋市は瀬戸内海の東の端大阪湾に臨んでいる。こんな関係で気温の温和な晴天の多い瀬戸内式気候に属している。すなわち北に海拔九〇〇余米の六甲山地を控え南は大阪湾に臨んでいるので冬の北西季節風も六甲連山にさえぎられ、一月の平均気温も四―五度という暖さであり、夏の暑さも海上より吹いてくる海軟風に和げられて二七―二八度に止まり、年平均気温一六―一七度の快適な気温を示す。またまわりを山地に囲まれた大阪湾に臨んでいるため年間の降水量も一一〇〇耗内外という少さであり、季節風の交替時期に当る六月や九月でも月間の降水量は二〇〇耗に達することさえ稀である。また冬期などでは五〇耗にも達しない有様で、年間の晴天日数は二〇〇日を越えるという具合で、晴天がよくつづく。

卓越する西風

風向は本邦他の地域と同様一般に夏は海上からの南西或は南風が卓越するが、海陸の気圧差がさして大きくないので風速も目立つほどの強さを示さない。むしろ六甲山越しの冬の西或は西北の風が強く意識される。年間を通じてみたら西風が多いことになる。また地形の関係から起る夏の海陸軟風のけじめは大きく、両者の交替時期に当る朝夕の風になやまされるのも瀬戸内地方に共通に見られる現象と云うべきであろう。

要するに芦屋市街地の気候は、夏の朝夕風の蒸し暑さが避けがたいとしても、東京、京都、福岡等の本邦の代表的都市の気候にくらべても気温の年変化が少いし、乾燥度が高く、風も一般に弱いという有様で本邦でも珍しい快適な気候を示す都市と云つてよい。

参考文献

- (1) 芦屋国際文化住宅都市建設計画書(中)資料分析篇 頁六六—九九 一九四九年

(6) 植生

植相 芦屋市域の主要部分を占める六甲山地の植物は、元来暖帯林に属している。しかし地表面は風化しやすい花崗岩やその崩壊した岩屑からできた更新層や沖積層でおおわれている上、近年人工的な破壊がひどくなったので本来の暖帯林相は殆んど姿を消し二次的林相でおおわれていると云つてよい。芦屋市域の場合も同様で海岸附近や山麓台地にかけて二次的森林と呼んでよい黒松、赤松が多いし、それらの松樹も地味の関係で多くは曲幹矮小な悪材である場合が多い。またこれらの二次的植物に交つて多いのがクスノキ科に属するヤブニツケイ、カゴノキを始めクロガネモチ、モチノキ、ヒメユズリハ、カクレミノ、ヤマモモ等の暖帯常緑林である。六

甲山地中腹部、海拔高度四〇〇米前後の剣谷国有林の附近一帶になるとブナノキ科のシラカシ、ツブラジイ、ウラジロガシなどが多くなる。花原断層谷以北の海拔高度六〇〇米の附近からはアカガシが多くなる一方赤松林中にモミ、ツガが混つてくる。また土壌が花崗岩質の酸性土壌を示す関係で、ツツジ科の植物が多いことも特色であるが何れにしても自然的或は人工的な植相の荒廢がひどく、まとまった林相を展開していることは珍らしい。

山地の荒廢と植相の破壊 現在見渡しても分る通り当市域の植相の荒廢はかなりひどく山地のいたる処に地肌が現われている。しかし山地からの崩壊物でおおわれている山麓台地を始め河川の運搬物で形成された沖積低地などは先史時代では植相はかなり豊富であつたらしく、山麓台地からその以南にかけて先史時代や古代人の居住遺跡がかなり残されているのもそのあらわれとも思われる。このような植相が現在みられるような荒廢状態を示すようになったのは、云うまでもなく花崗岩地域の治山治水の困難さによるであらうし、当地特有の晴天乾燥の氣候が岩石の土壌化を妨げた結果でもあらう。更に山地の自然的な荒廢化を助長した人為的な原因も大きいであらう。芦屋の山地の荒廢を人為的に助長したものとしては中世以降の相次ぐ戦乱が考えられるし、大阪築城に際して石材、木材をこの地に求めた豊臣秀吉が採石、伐木後の山地の管理よろしきを得なかつたことも、その原因の最たるものであらうと云われている。大阪築城に際しての伐木、採石の規模の大きさは、六麓荘山荘住宅地附近に長らく残されていた当時の採石担当者の記号をきざんだ数多い石からも想像にかたくない。それにもまして当市一帯の林相の荒廢を助長したものは、明治以降の当市の住宅化に伴う山林の伐採や登山者の火の不始末に端を発した山火事であらう。その理由はともあれ、山地の荒廢は今後の山津浪洪水の頻発を予想させるものであり

その対策が痛感される。

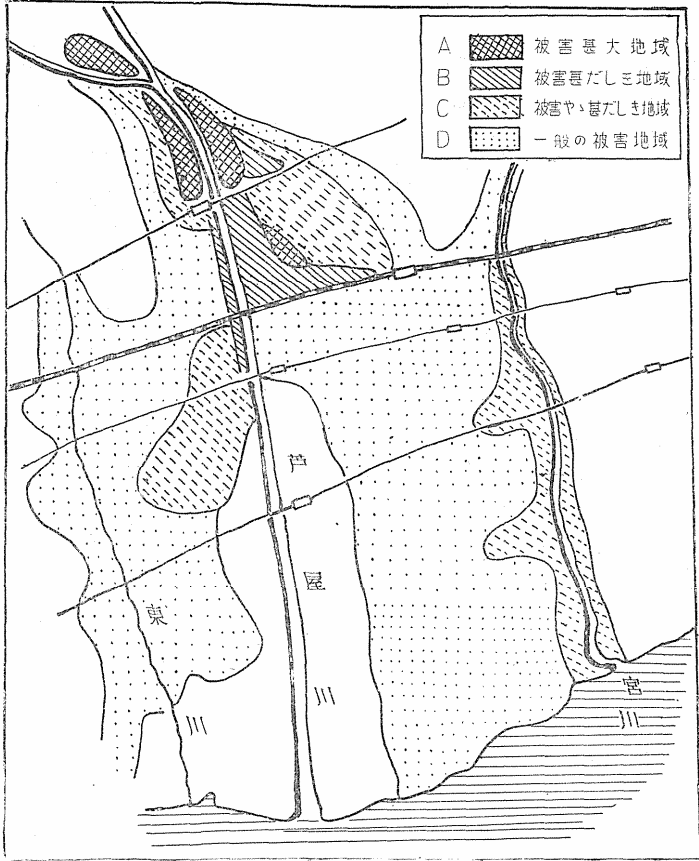
参 考 文 献

- (1) 神戸市農政局 六甲山系植相の概観 一九五〇年
- (2) 前 掲 書 芦屋国際文化住宅都市建設計画書(中) 頁一三八―一三九

(7) 自然の災害

河川の機能と水災

既に述べてきた通り現在芦屋市の主要な生活舞台となっている山麓台地や海岸の沖積低地などは洪積時代以後を通じて行われた六甲山地よりの岩屑の転落、多量の土砂や岩礫を運びつづけた河川の乱流の結果形成されたものである。ところが、居住者の主要な生活舞台が山地から低地に追々移るようになってくるとこれまで通りの河川の自然的な流れ方では自然の災害が跡を絶たなくなってきたから人々は河川の自由な流れ方を一方的に統制しようとするようになった。ここに河川の機能と土地利用上の矛盾が現われ始めたことになる。^①
今にその面影を残している天保年間の猿丸安時の手で成就した芦屋川の大築堤工事はこれまでの治水工事の集大成工事ともみられる大規模な土木工事で、その結果芦屋川の河道が一応安定し河川の乱流に基づく水害は著しく少なくなったと考えられる。しかし河道が人為的に安定させられれば、川床に土砂の堆積がひどくなり、洪水時に堤防が決潰するという矛盾が避け得られなくなったことは古文書にも明らかにされている通りである。^②
最近の河道の改修と昭和の水災 もともと芦屋市をとりまく自然界も常に相互に一定の条件のもとにある関連を保ちながら輪廻しているわけである。河川の改修が行われればそれだけ自然界の均衡が破壊されたことになり



第10図 昭和13年7月5日の芦屋市水害被災地域図

年と共に大きくなった。こうなってくると何か動機さえあれば自然界の輪廻に大混乱が起るのも当然のなりゆき

新しい均衡を保つまで混乱が避けられない。ところが明治、大正、昭和と当市の住宅地化が急激に進められるようになってくると、自然界の均衡などは無視され急傾斜地は崩され、森林は伐採されて宅地化されることになった。そのみならず、芦屋川の河床の一部は埋められて道路に利用され国鉄、私鉄の軌道が市街地を横断するという有様で自然界の均衡が急激に破壊され、自然界の混乱の原因が



第11図 昭和13年7月5日の水害状況

であった。昭和九年の水害に次ぐ同一三年七月の芦屋川、宮川の氾濫による流失家屋一四戸、全半壊家屋一二五戸、床上土砂堆積一五六戸及び床上、床下浸水二二〇〇余戸という大被害はその具体的な現われと云ってよい。この大水害こそ今後の土地資源の保全とその利用を考えるに当って当市民に大きい教訓を投じたわけである。

註(1) 前掲書 芦屋の里 頁四四

(2) 芦屋市史年表 頁四一 一九四八年

高潮

芦屋市は大阪湾に直接臨んでおり、とりわけ宮川から江尻川河口にかけてかなりの低湿地が広がっている。こんな関係で台風時には高潮に襲われ浸水の危険が大きい土地である。

とりわけ近年のように臨海地域の住宅地化が目立ってきたのに山地の治山がすみ、河川の運搬物が減少し、沿岸潮流による海岸線の後退がひどくなると高潮の浸入による被害の機会が多くなってきた。昭和九年の室戸台風や、同二五年のジェーン台風による被害などその好例であり、やがて防潮堤の促進を必要とするに至ったのも自然のなりゆきであろう。

参 考 文 献

- (1) 兵庫県水書誌 頁六六―六七 一九三九年
- (2) 石橋五郎 六甲山南麓大水禍速報 地理学 六卷一〇・一一号 一九三八年
- (3) 稲見悦治 六甲山南麓大山津浪記 地理教育 二九卷一号 一九三八年

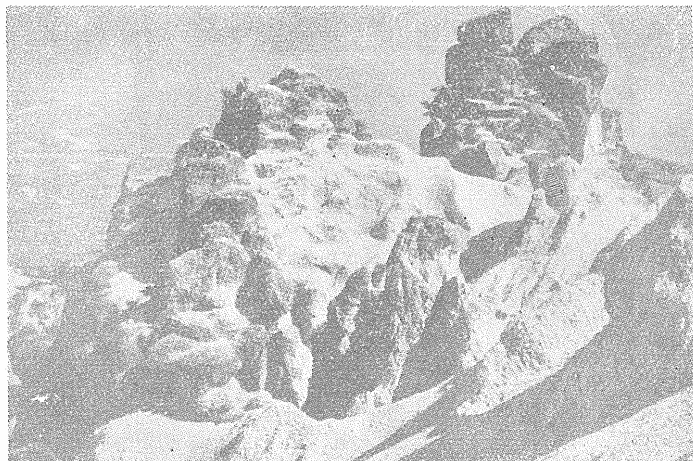
(8) 観光資源

文化的観光資源

芦屋市は畿内の要地として昔から知られた土地であり、古来名士の往来が盛んであった。こんな関係で古歌で有名な猿丸太夫の墓、伊勢物語で人口に膾炙した在原業平の別荘の跡、承和の事変で知られた阿保親王の御墓など史上に著名な人々の史跡と伝えられるものが少くない。また大阪平野の西の入口としての地形上の要地であったから、当市の台地を舞台として様々の歴史的な戦争が繰り返された。打出の楠町一帯は延元元年に足利尊氏の軍隊を楠本正成が撃破したところとして有名であり、鷹尾山の遊園地は室町時代に細川高国及び同澄元などの間で攻防戦が繰り返された古城址として有名である。また月若、公光などのごとく早くから謡曲“藤栄”“雲林院”のなかで謡われた由緒ある土地も珍らしくない。

自然的観光資源

前述の通り芦屋市内には文化的観光資源ともいうべき史跡が少くないとともに地形、地質が複雑であるから自然的な観光資源も少くない。すなわち阪急芦屋川駅の北方の高座川にかかる雌雄双瀑高座の滝は複雑な地質構造線を縫った高座川の侵蝕の結果生まれた名瀑で、多くの遊覧客を集めることになった。またその西北の花崗岩のひどい風化地ロックガーデンは芦屋市水災の原因の一つともいうべき悪地であるが、近時登山熱が高まるとともにロッククライミングの練習場として知られてきた。また天保年間の昔、猿丸安時の尽力で竣



第12図 ロックガーデン風景

功したと伝えられている芦屋川の水源地に近い奥池一帯の都塵をはなれた仙境地は、夏期テント村が開設され、ハイキング客で賑わっている。一方、市内西山町の六甲くろがねもち及び芦屋の松は、古来から知られた名木、古木で天然記念物に指定されているが、巨木既に姿を消してしまった今日、往時の林相を知るうえの有力な手がかりというべきものであろう。